
心バラード

ディスエグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心バラード

【Zコード】

Z09201

【作者名】

ディスエグ

【あらすじ】

ある日、初めて会った女の子と喧嘩した。次の日、その女の子は転校生としてやってきた。そのあと女の子は家の隣に引っ越して來た。平凡な高校生活に、次々と起くる困難。それらは、芹沢空の人生を大きく変えていく。様々な高校生の青春を描いた恋愛物語。

第一話・転校生がやってきた。

2008年夏

僕はまだここで過ごすような普通の高校生だ。

毎日ダラダラ高校生活を過ごし、気がついたら1年が過ぎていた。
僕は今高校2年…

このまま何もないまま高校が終わるのかなあ…

運命の出会いとか…

あつたらいいなあ…！

ジリリリリリッ…！

「うわっ…！…！」

大きな目覚ましの音で目が覚める。

「妄想混じりの変な夢だったなあ…」

俺の名前は芹沢空。セリザワソラ

夕凪高校に通う 17歳。

バスケ部に所属する普通の男。

特別モテた記憶もなく、人並みの人生を送っている。

「空、『ご飯覚めるよ』」
いつもの母の声。

「髪セツトしてから行く！！」

空は軽く髪をセツトし、居間に向かった。

朝食を食べ学校に向かった。

キーンコーンカーンコーン

「セーフ…！」

余裕こいてゆっくり歩いてたら遅れるところだつた。

空はぐてつと机に倒れ込む。

「珍しく遅かったな？」

男が一人空の前の席に座る。
こいつはナカムラヒヅキ中村響。

空の親友でバスケのライバル。

ちなみに美月というカワイイ彼女がいる勝ち組。

「おう響… 余裕つていいことないな…！」

「さあな…。

それより夕凪高校にある噂が流れてるぞ。」

「どんな噂…？」

空が聞くと、響は小声で言つた。

「なんでも一日後に、転校生が来るらしい。しかも超カワイイ女の子らしいぞ。」

響はワクワクしながら話している。

「そんなワクワクしてたら美月に殺されるぞ…」

空は軽く響に注意した。

それを聞いて響は普通に言った。

「転校生が来るんだから、ワクワクして当然だろ?」

「…まあ、そうだな…」

転校生が来るのが。

どんな子かなあ…

俺もワクワクしてきた。

その時はまだ、どんな子か分からず、空は期待に胸を膨らませるの
だった。

キーンゴーンカーンゴーン

授業が終わり放課後：

珍しく部活が休みだったので、空は一人寄り道をして帰ることにし
た。

コンビニでアイスを買った。余りに暑かったので二つも買ってしま
う。

「夕凪公園でも行って、のんびり食べよっかな…」

学校の裏にある夕凪公園は夕凪の町を一望できるスポットである。

「ふう…、疲れた。」

公園に着いたが誰もいない。

夕方だから仕方ないだろう。

子供達はお家に帰る時間だ。

空はベンチに座つてアイスを食べて涼んでいた。

シャリッ…

「やっぱシャーベット最高…！」

一人で盛り上がってる時、公園の丘の方に人影が見えた。

誰かいいるのかな？

疑問に思つた空は丘の方に歩いて行つた。

夕日に照らされた夕凪町、その美しい景色を悲しそうに見つめる女性の姿がそこにあった。

悲しそうな彼女の横顔、しかしその横顔はどこか神秘的で…、どこか魅力的で…。

空はしばらくその姿に見とれてしまった。

すると、彼女の目からキラリと涙がこぼれ落ちた。

もしかして…泣いてるのか？

心配になつた空は、思い切つて声をかけることにした。

「あの……どうかしたの？」

彼女から返事はない。

「ねえ…大丈夫？」
やはり返事はない。

ピトッ…

空はその子の頬に持つていたアイスを付けた。

「つ…！？冷たい…！」

彼女はこっちを振り向いた。

目に涙を溜めていて、悲しそうな顔をしている。

「な、なにすんの…？」
彼女は涙を拭いて、空の顔を見る。

「あつ」めん…

何回呼んでも返事がなかつたから…」

「考え方していたの。

それなのに、いきなりアイスを頬につけるなんて考え方られないわね
！…」

邪魔されたのがそんなに嫌だつたのか、彼女の言い方には怒りが込められていた。

「でも、返事しなかつたのはそっちだし、一方的に俺が悪いわけじゃないと思うけど…」

言い訳すると、彼女は空を少し睨んだ。

いや、睨んだように見えた。

「たとえそうだとしても、見ず知らずの一人の女性に軽々しく話しかけるなんて少し図々しい……！」

「違うって……！」

君が悲しい顔で泣いてたから、なんかほっとけなくて……」

「へえ……。

私が泣いていたことまで知つていながら、そつとしておこうと/or、優しい心のゆとりはなかつたのね……もしかして、そんな弱つたカワイイ女性を狙つ新手のストーカー！？」

（自分でカワイイと言つたぞ……）

空の心の声

「なんで俺がストーカー何だよ……！」

「17歳でストーカーなんて、そんな根暗な奴に見えるか？」

「見える……」

（見えてるんだ……。）

もう一度言つと/orが空の心の声

「とにかく俺はストーカーじゃない。」

もう話しかけないからそれだけはわかってくれ。」

「…わかったわよ。

もう話しかけないでね！！」

彼女も渋々納得してくれたようだ。

「はいはい、じゃサヨナラ…」

空は帰るうじ後ろを向く。

「あつ…！」

ちょっと待つて。」

彼女が呼び止める。

(話しかけるなと言つておきながら、自分から話しかけてきた！…)

「どうかした？」

「叫んだら暑くなつてきたから、そのアイスちゅうだい。」

(あれだけ問題になつたアイスを口で欲しがるか…)

「わかつた、やるよ。

はい、どーぞ。」

空はアイスを渡して立ち去る。

「ありがと…！ストーカーさん。」

(誤解は解けていなかつた！？)

空はぐくたぐで家に帰つて來た。

今日はマジで疲れた…
悲しそうかと思つたら、想像を超える元氣さだつた。
正直もう会いたくない。

でも、あの涙は……。

響が大声で言つた。

「なんと、転校生が今日来るらしい。先輩の話だとものすぐカワ
イイらしくや。

ショートカットの明るい感じの子らしい。」

響の発言を聞いた瞬間、空はすゞい嫌な予感がした。

「ショートカット……」

「何だ？ やつぱり興味あんのか？」

響がニヤつく。

「少し今は、ショートカット恐怖症なんだ……！」

「なんだそれ？」

響は？マークが出ている。

ガラッ！！

先生が入つて來た。

実際に男らしい我らの担任。

「まずはようう！－

んで、今日は転校生がいる。

うちのクラスになつたから仲良くなれよ－－。」

うちのクラスの発言に、クラスが湧く。

「んじや 本人に自己紹介してもらいましょう?
よし、入つていいぞ。」

ガラッ!!

入つて来た女の子は、間違いなく昨日の彼女だった。
彼女と目が合つた瞬間、一人は
「あ〜!!」と指を差し合つた。

「わがまま女!/?」

「ストーカー男!/?」

嫌な予感が的中した瞬間だった。

「何だ?おまえら知り合いか?」
担任が不思議そうに尋ねる。

「知りませんこんな奴」
「知りませんこんな人」

二人は声を揃えて言つ。

「そ、そつか..

じゃまず自己紹介だ。」

彼女が前に立つた。

「一見かえで（フタミカエデ）です。よろしくお願ひします。
彼女は頭を下げる。

パチパチパチ…

クラスから拍手が聞こえる。

なんとなく、男子の拍手が多い。

空は拍手をしなかつた。

「じゃ休み時間にでもいろいろ聞いてくれ。」

担任が言った。

「んで、一見の席は…空の隣…！」

空は驚きのあまり立ち上がった。

その様子を見て、自分の席が昨日の男の隣だと悟った一見もびっくりする。

「あの…先生、私も嫌です。」「一見が言った。」

「“も”つてなんだよ！
俺まだ何も言ってねえぞ。」「
空がツツコミを入れた。」

「なんか仲悪いから強制的に隣にある。
仲良く…な…！」

担任がにやつと笑つ。

(ドリ発動した。)

渋々一見は空の隣に座る。

「 ものしへ、ストーカーさん。 」

(性格悪すぎ…)

休み時間、女子や数名の男子に囲まれる一見。

それとは別の場所で、空も男子に囲まれていた。

「 なんでおまえ、彼女と知り合いなんだ！！
しかも席も隣だしよ… 」

「 僕は全然つれしくない… 」

「 そんなのどうでもいい。あんなにカワイイし、明るい、はつきり
いつて彼女はパーフェクトなんだ。
すでに先輩も動いてるそつだ。 」

あんまり仲良い姿見せてると…死ぬぞ…！」

(心配してんの？脅迫してんの？)

「 とにかく、俺らが言いたいことは…。 」

空は「ク」と息をのむ。

「羨ましいってことだ。」

（それだけ……！？）

馬鹿どもと話を終えて、

特に仲が良くなることもなく、授業は終わった。

「あーやっと終わった。」

今日は特別長かった……」

空は疲れた様子でかばんに教科書を入れる。

一見はせつねじりかに行ってしまった。

まあ関係ないけど……

「空、部活行くぞーー！」

響が呼ぶ。

「今行く。」

部活も終わり、一人家に帰る。

「ただいまー」

靴を脱いで居間を通ると母さんが呼び止めた。

「ちよつと隣の家に父さん呼びに行つてきて。」

「なんで隣の家？」

「父さんの昔からの親友が隣の家に帰つて來たから、手伝つてんの！」

早くいいひでらひこじめい。

再び靴を履いて玄関を出る。

ピンポン！！

隣の家のベルを鳴らす。

「はーい。」
誰かが走つてくる音が聞こえる。

なんか嫌な予感…

ガチャヤ！！

中から出でたのは一見かえでだつた。

「ええつ！？」

一人は驚きのあまり一步後退する。

「なんでおまえがいるんだよーー！」

「それこのやつのはつだし…
なんでもいいとして、私の家に来んのよー?」

「隣…俺ん家。」

実際に残念やつにして、空は言った。

「もしかして、今家にいるお父さんの親友つて…」

「俺の父さん…」

「…………はあ…………」

呆れるあまり一見はため息をついた。

その気持ちは痛いほどわかる。

親友なのだから、度々家族ぐるみで会つだらう。

ならば当然、ここつとも会つであろうからだ。

「マジ最悪…

もう家に来ないでよ。」

(父さんに言つてられ…)

「言つとくけど、私あんたの」と大つ嫌いだから…」
「知つてゐ…。」

「じゃあ伝えとくから後帰つてこよ。
つてか帰つて……」

（ひどい嫌われようだ…）

ガチャ…！

勝手にドアを閉められた。

「はあ…」

このこと、クラスの奴らに言つたらホントに死ぬかもしれないな…

空は肩を落として帰つた。

これが俺の生活が変わり始めた最初の日だった。

これからどうなつてしまつんだろう…

そんな先のことを心配する前に、明日生きてこられるのか不安に感じた空だった。

第一話・事件発生――――

ジココココココ――――

「んんっ――――」

6時半、隣の家のでつかに田覗ましの音で窓が起きた。

「何この窓屋か――――」

自分の部屋の窓を開けるとすぐのところにある他の部屋から、音は聞こえて来た。

ジリリリリリ――――

音は絶えず鳴っている。

こんだけ鳴っているのに起きないのかよ――――

ノンノン――――

窓を叩く。

「あの……田覗まし止めもありっこですか?」

返事はない。

寝てんのか?

「あの……失礼します。」

隣の窓を開ける。

ドキッ――――

その部屋は一見かえでの部屋だった。

「見の寝顔は、今までのイメージをぶち壊すほどかわいい顔をしていた。

「黙つて寝てる時はかわいい顔なのに、起きるとあれだもん…」

ジリリリリリ…

田覚まし止めないと…

空は時計に手を伸ばす。

パチッ！

田覚ましを止めた瞬間、一見が田を覚ました。

・・・・・。

目が合つたまま、一人とも固まっている。

(この状況は…まずい。)

「ああ――――！」

「違つ…誤解だ…！」

「来ないで変態！！

寝込みを襲うなんて最低！－！」

「田覚まし止めただけだつて……！」

「止めて……いや……！」

一見が枕を振り回す。

「うわっ……あぶね……！」

「……階だつて……」

落ちたら怪我する……」

バシッ！！

枕が顔面にヒットする。

「がつ……！」

手が離れる。

全てがスローモーションで見えた。

ガラララ……ガツシャーン……！

勢いよく物置小屋に落下。

「なんだ……雷か！？」

「今のですごい音は何？」

家族が一斉に起き出す。

「俺の口一番の田舎まし音が鳴った瞬間だつた。

「いひつ……もつと丁寧に……」

家族に消毒液を塗つてもらつてゐる。

幸い、当たり所はよく、打撲と切り傷だけで済んだ。

一見の父さんと俺の父さんが謝り合つてゐる。

「見は……？」

知らん顔してゐる。

でも、時折こつらを見でてゐるで心配はして貯めてる…………まあ……！」

俺は「この出来事を一生忘れないだつ。

キーんパーんカーンパーん

ざわざわ……

クラスはざわつててゐる。

俺の頭の包帯とあちこちに點つた絆創膏が原因のようだ。

「何……その怪我どうした？」

響が心配してやつてきた。

ビクッ！－

一見が反応したのがわかつた。

「突き落とされた。」

「は？！－？」

響はまたしてもマークをつくる。

「一階から突き落とされたんだ。」

「違うでしょ－－！」

一見が会話に入ってきた。

「あんたが私の寝込みを襲おうとするから。」

私は正当防衛よ……」

「寝込みを襲つた？」

響が一言。

「だからあればおまえのつるやこ田覚ましを止めただけだつての－－！」

「田覚ましつて、一緒に寝たのか！？」

響が一言。

「だつたら私に言えれば良いじやない。田覚まし止めつて。」

「二人で寝たのか？」

響が一言。

「おまえ起きなかつたじゃん。」

「一緒に寝たのか…」

響が一言。

「セツキから何言つてんだよー…?」

「セツキから何言つてんのー…?」

二人一緒に言つた。

喧嘩ばかりだけど…

「一見セツ…」

クラスメイトの女の子が一見を呼ぶ。

「何? どしたの?」

「あそこここいる先輩が呼んでたよ。」

3年の森本先輩…

一見に用事?

空っぽけーっとその様子を見ていた。

「ありや、告白だな…」

響が前に座る。

「さすが一見さん。
もう何人目だろ?」

「そんなにきてんのか?」

「俺の『データだと、森本先輩で8人目だ。』
「へえ…あいつモテてるなあ!」

「あつ帰つてきた。」

空の隣に座る。

「ふう…」

「告ひられた?」

空が聞いてみた。

「まあね…」

(余裕そうな顔がいらつくなー…)

「おまえかなりモテてるなあ?」

「そつ?普通じゃない?」
(我慢だ…我慢だ俺…)

「おまえのどこがいいんだろうなー?」
皮肉を込めて言い放つ。

「あんたには一生わかんなこわよーーー。」

「まあまあーーー。」

始まりそつだつたので響が止めに入る。

放課後

「空、部活行くぞーーー！」

響が呼ぶ。

「今行く。」

「ちよつと待つてーーー。」

一見に呼び止められる。

「なんだよ？」

「部室行くんでしょ？」

私も行くから待つてーーー。」

「なんでおまえを待たないと行けないと行けないと…」

「私一人で歩いてると、男子に捕まつて告白されるんだからあんたたちといればすんなり行けると思つて。」

「なんかイラッとするけどしかたねえ…行くぞーーー。」

一見を連れて歩く…

男子の視線が恐ろしいものだった…

「なあ…空?」

部活姿になり、体育館でバッシュを履いてるとき、響が呼んだ。

「なんだ?」

「最近、バスケ部見に来る奴多いよな…?」

たしかに現時点で数名見学に来ている。

「田的是部活じゃなくて、あいつだろーー!」
指差す先には一見…

「やつぱりか…

バスケやってるときの一見さんかわいいもんなーー!」

「おまえ、マジに美刃に殺されるやーー!」

「おまえはかわいいと思ったことねえの?」

「……ねえよ。」

そのとき、一見の無邪気な寝顔が頭を過ぎる。

「誰が彼女を射止めんのかな?」

「知るか…部活やんぞ…!」

女バスに注目が集まる隣のコートで、練習に励む空たちだった。

部活終了後、空は一人で遅くまでショート練習をし、終わった時、辺りは真っ暗だった。

「ああ疲れた…
とつとと帰ろう。」

同時刻、体育館裏

「…こんな時間に何の用ですか…先輩?」
そこには一見と森本先輩。

「一見ちゃん、やっぱり俺君が好きなんだ。
付き合ってくれないか?」
「その話はお断りしたはずです。ごめんなさい。」
一見は帰ろうとする。

ガシッ！

森本先輩に腕を掴まれる。

「もう言わずに、付き合ってくれよ…。」

「放してください…。」
手を振り払う。

「ひどいなあ…」一見ちゃん。そんな態度だと、傷つくなあ。」

森本先輩が不気味に一やつべ。

「いや、来ないでよ…！」

壁に挟まれ一見は逃げられない。

「逃げらんないよ…！」

森本先輩はじりじり追い込む。

「いや、誰か助けて…！」

「へへへへ…！」

森本が一見に触れよつとしたときだった。

ガシッ…！

誰かが森本の肩を掴む。

「何してんだよ…！」

「お、おまえは…！」

一見はそこで意識を失った。

ジリリリリリ…！

ガバッ！

一見が目を覚ますと、部屋のベットにいた。

「あれ？ 私昨日、先輩に襲われそうになつて…
思い出せない。」

ガラッ！！

「おひー！ 今日は珍しく起きたのか？」

向こうから空が顔を出す。

「芹沢… 昨日私どうしたの？」

なぜか芹沢に聞いてしまつた。

「はつ？ 何の話してんだ？」

「そうよね…

芹沢が知つてる訳無いか。

何考えてんのよ、私。

「なんでもない。」

キーンゴーンカーンゴーン

「おはよーーー！」

一見が登校。

「おはよー一見さん。

ねえ…昨日の話聞いた?」

クラスの女子が話している。

「話つて?」

「森本先輩のこと。

昨日の夜、後輩の女子に襲い掛かってひとして失敗したらりじよ。」

「その話…」

「なんでも襲い掛かる直前に誰かに捕まつたんだって…」

!!!

一見が反応する。

「誰? 誰が捕まえたの?」

「それがわかんないんだって。

あんな遅い時間に学校にいた人いるのかなあ?」

一見は急いで響のところに走った。

「ねえ響君!」

昨日部活の後、残つてた人いる?」

「部活後…?」

それなら空だろ。あいつ遅くまでシューイングしてたらしげ…

「えつ…? 芹沢…」

朝は何も言つてなかつたのに。

ガラツ

「おはよーーー！」

空が元気に登校。

ドキッ！－！

一見は空を見た瞬間、緊張が走る。

何：今の？

胸がドキドキしてる。

ありえない！－！

空の平凡な日々。

一つの事件を経て、なにかが変わり始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920i/>

心バラード

2010年10月22日14時43分発行